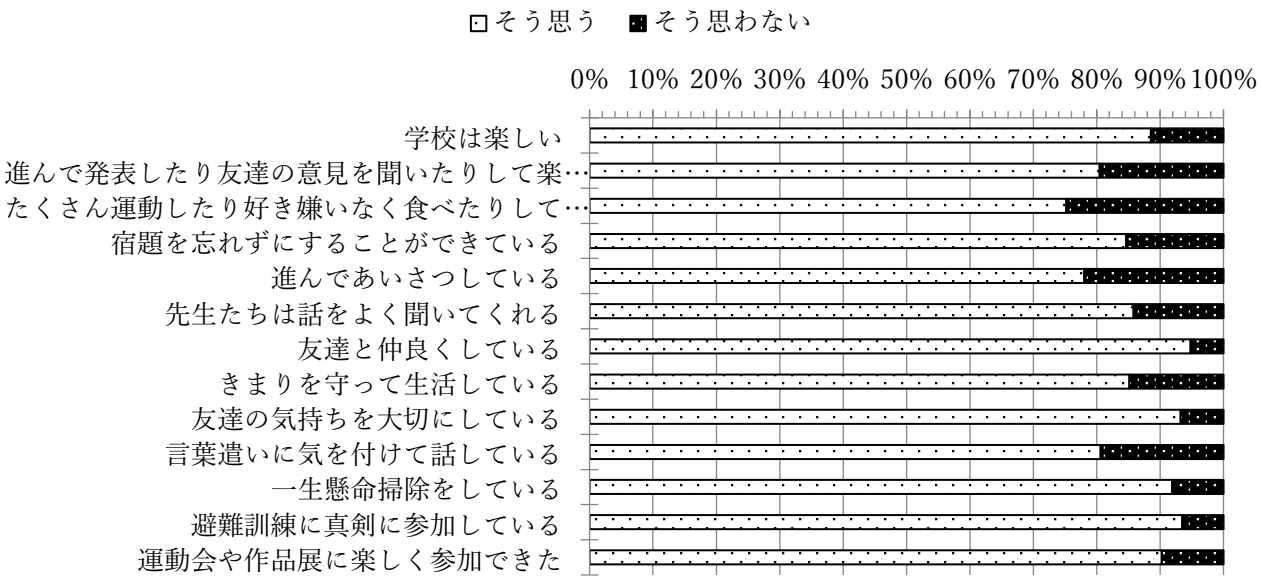
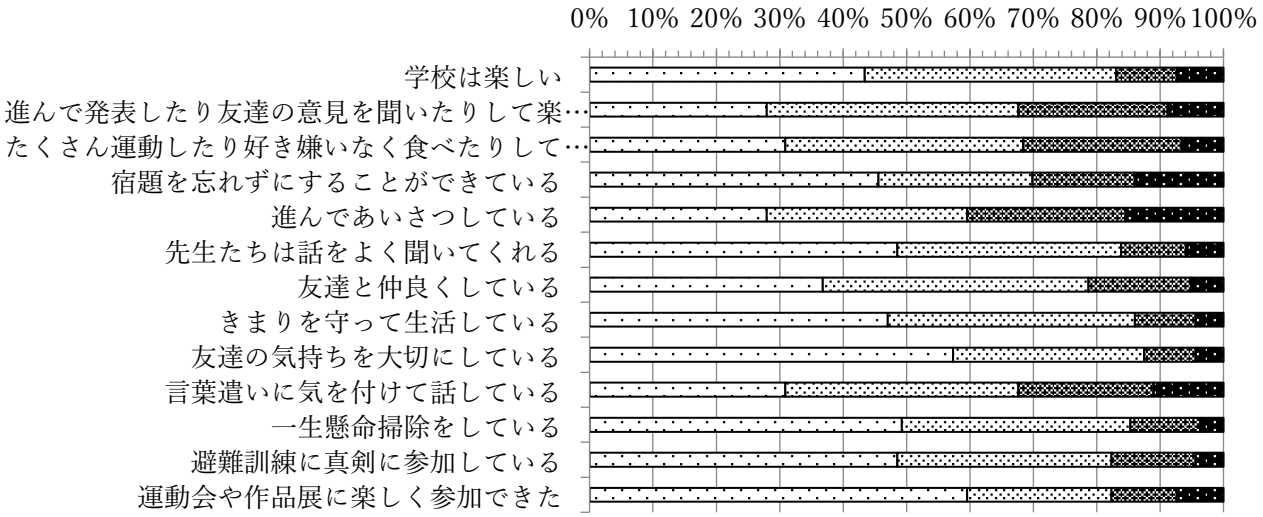
令和元年度学校評価　低学年児童アンケート



令和元年度学校評価　中学年児童アンケート



＜低学年分析＞

・　「楽しく運動したり好き嫌いなく食べたりしている」が昨年度と比較して１０ポイントダウンとなった。基礎体力を増進させる教育を家庭と連携して推進する必要がある。

・　「先生たちはよく話を聞いてくれる」が８ポイントダウン。低学年の稚拙な言葉にも受容と共感をもって傾聴する姿勢をもちたい。

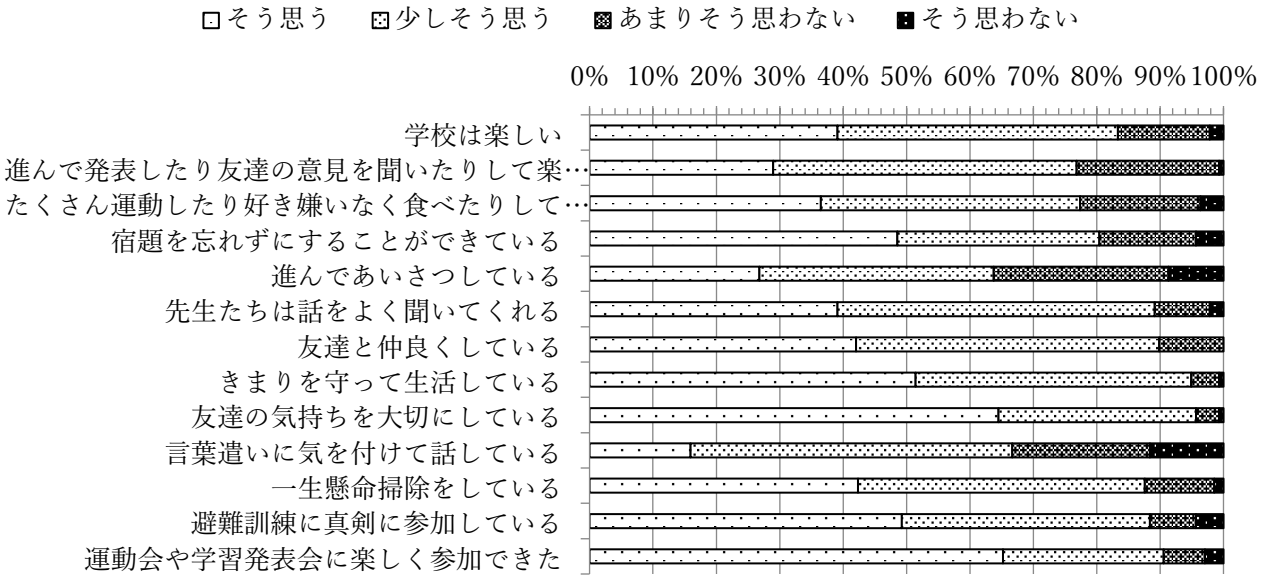
・　あいさつがよくでき、心優しく、友達の思いによりそう児童が多いが、低学年だからこそ正しい言葉遣いの指導を家庭と連携して行う必要がある。

＜中学年分析＞

・　「進んであいさつしている」は４割が否定的であり、うち１６％が「そう思わない」と応えている。言葉遣いの指導と併せて、地域・家庭と連携した目標を共有した取組が必要である。

・　友達と協働した問題解決学習や学び合う学習の場面設定とそのための授業規律の確立が課題である。

令和元年度学校評価　高学年児童アンケート



＜高学年（全校児童）分析＞

・　「学校は楽しい」に対して「あまりそう思わない」「そう思わない」児童が低・中・高学年平均約１５％で６０人を超える。このような児童が各学級に４・５人在籍している。個々の発達特性により集団生活になじみにくい状況があったり、学習への不安があったり、いじめ行為・問題行動への不安があったりと、理由は多様であろう。「先生たちは話しをよく聞いてくれる」への否定的回答の全校平均が約１４％であり、この２つの項目への回答への相関性も一考すべきであると考える。多様な課題を抱える児童一人一人へのさらなる受容と共感が必要であろう。

・　「進んであいさつしている」に対して否定的な回答をした児童が高学年では３６％、中学年では４０％となった。全校で約１３０人ができていないと自己評価している。保護者や地域からも同様の意見があり、学校をあげての地域・家庭と連携した目標を共有した取組が必要である。

・　「言葉遣いに気をつけて生活している」に対して「そう思う」と回答した児童は、学年が上がるほどに低下している。高学年においては、否定的な回答が昨年度の２６％から８％ダウンしている。これにも学校をあげての地域・家庭と連携した目標を共有した取組が必要である。

・　児童のほとんどは集団のきまりを守り、互いの気持ちに配慮しながら気持ちのよい生活を送ることができるよう心配りをしている。また、この様子は学年が上がるほどによく見られ、発達段階とともに自立に向かっているといえる。